Chapter 11

オーストラリアの CLIL（日本語教育　理科）の授業

柳　善和
名古屋学院大学
高橋美由紀
愛知教育大学

1. はじめに

この章ではオーストラリアの外国語教育の状況を紹介し、その中でも日本語教育で実施されている CLIL の授業の事例を検討する。

オーストラリアでは、英語が共通語として使用されているが、一方で国家として国土面積が広く、人口密度が小さいために、アジア圏を始めとする周囲の国々との関係を良好に保つことに、特に第 2 次世界大戦後は注力していた。米国、英国など英語圏の国々は、外交ご教育に対して関心が薄いということがしばしば言及されるが、オーストラリアでは多くの外国語をシラバスに取り込むなど、外国語教育にも国家として重点を置いてきたと言えるだろう。

その中でも日本語教育は、同じアジア太平洋圏にある国として、また貿易の点でも原料を日本に輸出し製品を輸入する枠組みで、重視されてきた。

このような観点から、オーストラリアのビクトリア州、メルボルン周辺の学校での授業を参観し、また担当教員への聞き取りを行い、その様子を報告し、日本の外国語（英語）教育との関連を考察したい。

2. オーストラリアの概要及び日本の関係

2.1 オーストラリアの概要

オーストラリアの面積は 7,692,024 平方キロで日本の約 20 倍である。これに対して、人口は約 24,990,000 人（2018 年 6 月現在）で、日本の約 19% である（註 1）。人口は沿岸部に集中しており、内陸部はほとんど砂漠である。歴史的に見ると、移民によって人口を増やし、それによって産業を発展させてきた。もともとイギリスの植民地として沿岸部から開発され、ヨーロッパからの移民が多かった。しかし、戦後は多文化共生国家を標榜し、アジアをはじめとして多くの地域からの移民を受け入れている。

国土面積と人口のバランスを考えると、歴史的に移民受け入れの必要性は常に存在してきたと言える。

2.2 オーストラリアと日本の関係

オーストラリアと日本は、同じアジア．オセアニア地域の国として密接な関係を築いている。日本との貿易関係を見ると、まず、日本からの輸入は、オーストラリアの全輸入量の中で、2016 年度第 3 位（6.6%、1 位は中国 23.1%、2 位は米国 9.6%）である。内容は、自動車 44%、鉱物性燃料 13%、雑製品（衣類、家具等）10% となっている。また、日本への輸出は、全輸出量の中で第 2 位（11.7%、1 位は中国 28.3%、3 位が米国 6.3%）である。内容は、石炭・コークス及び練炭 32%、天然ガス及び製造ガス 29%、金属鉱 18% となっている。全体として、日本へ地下資源を輸出し、日本から自動車、石油製品などの工業製品を輸入していることがわかる（註 2）。

以上のように、日本はヨーロッパの国々より地理的に近く、明治維新以後急速に軽・重工業が発展し、人口が少ないオーストラリアにとって貿易相手国としては重要な国であった。

2.3 メルボルン

この論文で紹介する学校は、いずれもメルボルン郊外に位置する。メルボルンはビクトリア州の州都であり、メルボルン都市圏の推定人口は、2017 年現在約 485 万人である（註 3）。オーストラリアでは、シドニーに次いで第 2 位の大都市である。近代的で忙しい大都市のイメージを持つシドニーと比べると、歴史的な建物や文化が残り、落ち着いて住みやすい印象を持たれている。また、留学生の招致にも積極的であり、多くの学生が学んでいる。

3. オーストラリアにおける外国語教育

3.1 オーストラリアの教育制度

オーストラリアでは 1901 年に制定された憲法によって、教育は各州の責任であると定められている。しかし、1980 年代以降教育制度等の枠組みを統一しようという動きが進み、2010 年以降は義務教育の終了が 10 年生（日本の高校 1 年生に当たる）とされた（青木・佐藤、2014、p.19）。

また、オーストラリアの初等・中等学校の設立者別に見ると、州立学校、カトリック系学校、独立系学校の 3 種に分けられる。オーストラリア全土で合計 9,414 校があり、そのうち州立学校が 70.5%、カトリック系学校が 18.5%、独立系学校が 11.1% となっている（ACARA、2016）。

3.2 オーストラリアの外国語教育

オーストラリアでは外国語教育で教えられる言語は LOTE(Language Other Than English) という名称で呼ばれている。従来の教養としての外国語（フランス語など）の他に、先祖の言語（イタリア語や現代ギリシャ語）、さらに、移民の第 1 世代や先住民の母語などがその対象とされている。一方で、1995 年には NALSAS（The National Asian Languages and Studies in Australian Schools Program、オーストラリアの学校におけるアジアの言語とアジ

アの学習に関するプログラム）という計画を発表し、アジアの言語や地域研究を学校のカリキュラムに導入した。この計画では、対象とする重点言語として、日本語、中国語、韓国語、インドネシア語の 4 か国語が指定された。この計画は 2002 年に中断したが、これらの 4 か国語の教育を始め、外国語教育に対して関心が高まっている（青木、2008; 嶋津、2010）。

具体的にどのような言語が扱われているかをビクトリア州の例で見ると、2017 年度の登録者数では初等学校と中等学校の合計で 1 位がイタリア語の 19.0%、2 位が中国語の 18.7%、3 位が日本語の 17.7%、4 位がインドネシア語の 15.7%、以下、フランス語 11.3%、スペイン語 4.3%、ドイツ語 4.3%、Auslan（オーストラリア手話）4.2% と続く（註 4）（Victoria State Government Department of Education and Training、2017）。

また、各言語の 2011 年度からの登録者数の変化を見ると、2011 年度には 1 位がイタリア語、2 位が日本語、3 位がインドネシア語、4 位がフランス語だった。中国語の履修者数は、この間に 4 倍近く増加している。

4. 授業参観の状況及び教員への聞き取り

4.1　日本語教育の中の CLIL（生物の授業）

（1）授業参観校

参観した学校はメルボルン近郊にある私立のカトリック系中等学校で、全校で約 1,800 人の生徒が通う。訪問したのは 2017 年 8 月 30 日である。

8 年生（日本の中学校 2 年生にあたる）では、一部の授業で応募制による CLIL を導入している。訪問時には 2018 年度の日本語とイタリア語によるプログラムについて説明会の広報が出されていた。

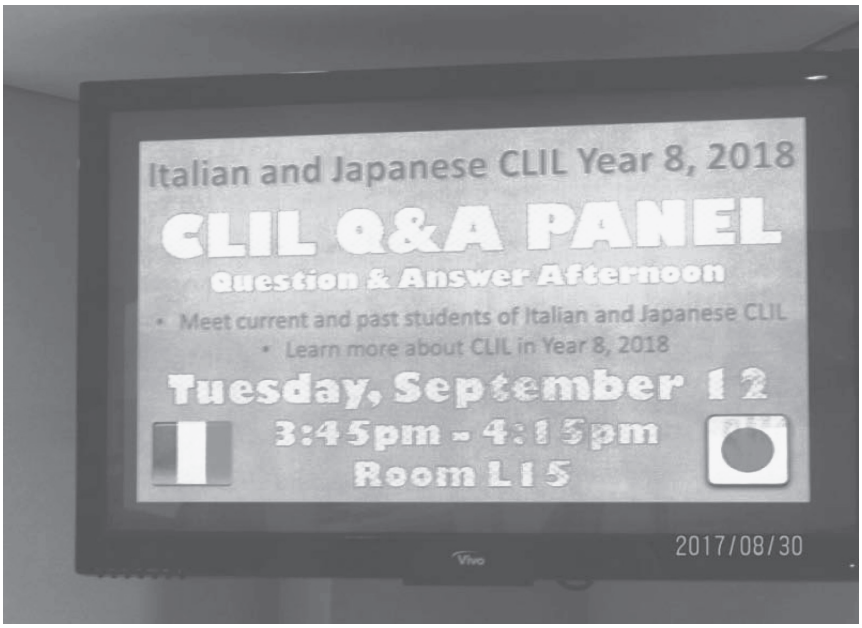

写真 1：次年度の CLIL の説明会の広報

（2）8 年生の CLIL の授業（生物）

この授業は 45 分の授業を 2 授業時間続けて行われた。受講している生徒は 13 名であり、応募制で実施されている。生徒たちは極めて真面目で積極的に授業に参加していた。担当しているのは、2 名のオーストラリア人教員で、それぞれ使用言語は英語と日本語で役割分担しており、いずれもオーストラリアの生物の教員免許を持っている。

授業は科学教室の 1 つが使用されていた。教室の壁には、日本語の専門用語が掲示されていた（写真 2）。

写真 2：科学教室の掲示

最初日本語で挨拶し、続いて日本語で立ったままで復習を兼ねた Q&A を行い、できた生徒から着席するという活動で始まった。続いて、前回の授業の復習として、心臓と血液循環について、グループで教室の何箇所かに用意された「station」に置かれている資料を順に確認して、ノートに筆者する活動を行った。この日は消化器系を中心にした授業で、生徒たちはまず、先ほどと同様に教室の何箇所かに設けられた「station」で、そこに置いてある資料を見ながら、自分のワークシートを完成させる。1 分 30 秒ずつで、場所を移動していく（写真 3）。

それを終えると教員が英語でその日の授業の概要を説明する。

次に日本語で、器官系（細胞→組織→器官→器官系）の用語を読ませて、カードを選ばせ、その後英語で確認する。そのカードを切らせてそれぞれのノートに貼る作業をする。消化器系を説明する日本語のビデオを視聴する。食道→食＋道（route）、胆嚢、門（gate）など漢字の意味や形を英語で確認する。

写真 4 は、生徒が消化器系のノートをまとめているところである。消化器の名称（口腔、食道、胆嚢、胃、大腸など）を記入し、さらにそれぞれの説明を英語で記入していることがわかる。

日本語の活動をいったん終えて、英語でさらに詳しく説明する。消化のしくみとして、胃で消化する活動（摂取した食物を細かく分解する物理的な活動）と小腸で栄養成分をそこから吸収する活動（化学的な活動）の違いを、教員が実験して見せる。

最後にまとめとして、プリントを使ってノート作成の作業を行い、やりきれなかった分は自宅学習として指示する。さらに、全員起立して Q&A を行う。

(3) 担当教員への聞き取り

・CLIL になじむ教科として、理科、歴史、地理、宗教、芸術などが考えられる。

・なぜ生徒たちはわざわざ外国語で学習しようとするのか？英語で学習した方が負担が少ないではないか？との筆者の質問に、「難しいからこそ挑戦しがいがある。英語で普通にやっているだけでは簡単で面白くない。」との答えが即座に返ってきた。

写真 3：生徒が「station」でそこに置かれた情報を自分のワークシートに筆写している。

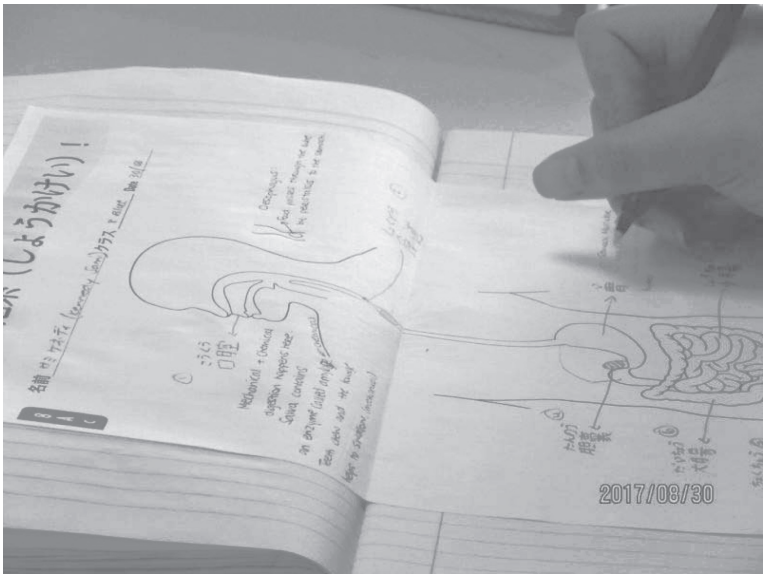

写真 4：8 年生の CLIL の生物の授業で生徒がノートを日英語の 2 言語でまとめている。

4.2　日本語教育の中のプロジェクト学習

（1）授業参観校

メルボルン郊外にある 7 年生から 12 年生までの生徒約 1,700 人が通う大規模校である。州立学校であり、対象になる生徒は学区内の住民であるが、学校の評価も比較的高く、学区外からの入学者も一定数いる。ただし、義務教育の対象になる学年では、学習意欲のない生徒も含まれる。

この学校では全生徒にタブレット PC を購入してもらい、学内ネットワークに接続して、様々な連絡や教材の提供を行っている。授業中も担当教員のサーバーからその時間の教材が配信され、それらを参照しながら授業を受けていた。

（2）10 年生の日本語のプロジェクトの授業

受講していたのは 10 名（女子 6 名、男子 4）で、テーマは「りょこうのけいかく」を中心にしたものだった。「いつ」「どこに」「だれと」「どのくらい」「何日くらい（何日間）」「どんなところ」「～から～までどうやって（何で）」といった問いをもとにしたワークシートに取り組み、おおよそ完成した後にペアワークで練習する時間を設ける。また、来年の日本ツアーの実物広告を出すという課題に対して、同様の項目を設定して、ペアワークを行う。授業は週 5 回（1 回は 45 分× 2）行われている。

この学校では日本語のための特別教室（普通の教室に生徒の成果物の掲示や教材などのストックが置いてある）が用意されている。以下の写真 1 は、教室の掲示板に掲示されている 10 年生の成果物である。テーマは「仕事」で、生徒が将来取り組みたい仕事について、それぞれの生徒が作成したポスターが掲示されている。「獣医」「モデル」「宇宙飛行士」「科学の先生」などをタイトルにして、自分たちで考えたその詳細について、イラストや写真などの資料とともに文章が掲載されている。

写真 5: 10 年生の日本語の授業の成果物

この学校の生徒は 1 人ずつタブレット PC を持っており、学内のネットワークにはそれぞれの授業の教材や連絡などがアップロードされている。授業中でも、この設備を利用しながら受講しているが、1 人で取り組むだけでなくペアやグループで相談しながら利用している生徒も見られ、活発な意見交換が行われていた。授業全体 90 分のうち、約 30 分がこの作業に当てられていた。

(3) 担当教員への聞き取り

・7 ～ 8 年生は外国語は選択必修であるため、学習意欲の低い生徒も含まれ規律を守らせるのが困難なことがある（これは外国語の授業に限らない）。9 ～ 10 年生は、外国語の授業を選択して履修しているため、学習意欲の全くない生徒はいなくなる。授業態度も良好である。。

・4 技能をバランスよく学習することは重要である。

・今回の「りょこうのけいかく」のようなプロジェクトを中心にすることは、目標言語を実際に使いながら学習することになり、言語学習にとって有効である。

5. 考察

5.1 日本語教育について

日本語については、オーストラリアにとって日本が長い期間にわたり、重要な貿易相手国であったこともあり、様々な場面で交流する機会が多かったことで、日本語学習が盛んになってきた経緯がある。また、オーストラリアにとっても重要な貿易相手国の言語を知ること、また地域研究などによって知見を蓄積しておく必要もあったと考えられる。

また、教員からの聞き取りの中で、「難しいことに挑戦したい」という意識が、特に中等学校の生徒の中にある、という指摘があったが、英語と全く異なる日本語そのものが生徒たちの「挑戦」の対象になっていることもある。また、日本がオーストラリアに比べて長い歴史を持っていることも興味の対象になる、という指摘もオーストラリアの日本語教員からあった。

5.2 オーストラリアの外国語の授業の特徴

本研究で、授業参観をした授業では、「知識･技能」の積み上げよりも、「思考力･判断力･表現力」を向上させることが目的とされていた。CLIL の授業や、プロジェクト型学習（りょこうのけいかく）のように、学習言語を使って様々な活動をすることが中心になる。

成果物としては、ポスターの教室での掲示（「しごと」）が挙げられよう（写真 5）。また、CLIL の授業では、日本語で学習する生物の知識や見方･考え方もその成果物と言える。単に言語項目を知識として蓄積することとは異なるアプローチである。

CLIL が盛んに実施されているヨーロッパと異なり、オーストリアでは英語が公用語とされている。そのような状況では一般的に外国語教育がなかなか広がりにくい。また、オー

ストラリアでは多くの移民が流入しており、むしろそのような人々に英語を教えることが国としても重要であるとも考えられる。ヨーロッパでは、多くの国が国境を接しており、隣国の言葉であったり、主要言語を習得することに対する動機づけも高い。

オーストラリアで、外国語教育に対して現在でも高い関心があり、単に知識・技能として学習するのではなく、それを使っており高い次元の活動ができるように、学校教育が設計されているのは興味深い点であろう。

註：

(1)(2)日本外務省ホームページによる。

https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/australia/data.html

(3)Australian Bureau of Statistics ホームページによる。

http://www.abs.gov.au/Ausstats/abs%40.nsf/mf/3218.0

(4)各学校では通常複数の言語が提供されているので、この統計では各学校で導入されている言語がすべて集計されている。

参考文献

ACARA(Australian Curriculum, Assessment and Reporting Authority)(2016). *National Report on Schooling in Australia 2016.*

https://www.acara.edu.au/docs/default-source/default-document-library/national-report-on-schooling-in-australia-2016fe9f12404c94637ead88ff00003e0139.pdf?sfvrsn=0

青木麻衣子（2008）.『オーストラリアの言語教育政策：多文化主義における「多様性」と「統一性」の揺らぎと共存』東京：東信堂

青木麻衣子･佐藤博志（編著）（2014）.『オーストラリア･ニュージーランドの教育―グローバル社会を生き抜く』東京：東信堂.

Australian Bureau of Statistics ホームページ http://www.abs.gov.au/Ausstats/abs%40.nsf/mf/3218.0

外務省ホームページ（2018）.https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/australia/data.html（2018 年 8 月 30　日検索）

嶋津拓（2010）.「オーストラリアにおける「教育革命」とアジア語教育政策―日本語教育に焦点をあてて―」『日本言語文化研究会論集』第 6 号、1-13.

Victoria State Government Department of Education and Training (2017) *Languages Provision in Victorian Government Schools 2017.*

柳善和・高橋美由紀（2019）「オーストラリアの初等・中等教育における外国語教育」『中部地区英語教育学会紀要』48. pp.213－220

https://www.education.vic.gov.au/Documents/school/teachers/teachingresources/discipline/languages/EduState_Languages_Provision_Report_2017.pdf